

こどもが まんなか

いわてのWAっこ

ワクワクドキドキ!



ハンカチ上げ

足踏みかけ

すべての子どもたちと学校の
ウェルビーイングの実現
を目指して

いわて幼児教育センター通信

No.4 令和8年 10月2日発行

発行・編集

岩手県教育委員会事務局学校教育室
(いわて幼児教育センター)

本通信は岩手県 HP からダウンロードでき
ます

<https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/kyouiku/gakkou/1006358/1058868.html>

きらきら☆いわてのせんせい

「つながるってどういうこと？」

～園・いわて幼児教育アドバイザー・市の担当指導主事・幼児教育専門員～

いわて幼児教育センターの専門員が訪問支援した園の姿をご紹介します。
今月は、「いわて幼児教育アドバイザー養成のための実地研修」(園での
観察・助言)がテーマです。

私達が訪問支援に伺う前に、各園に「事前確認シート」を提出していただいています。シートには、園のよさや課題、アドバイスを受けた内容などが具体的に記入されています。ある園のシートの「保育参観・カンファレンスの進め方」という項目に「3人ずつのグループに分かれてロールプレイを実施(10分×3回)」という記述がありました。

「どのような研修を計画されているのだろう」とワクワクしながら事前打ち合わせの電話をしました。その園では「報・連・相のスピード感」「先生同士の横のつながり」「コミュニケーション力」を課題として捉えており、その改善につながる研修を実施したいとのことでした。園長先生が受講したOJT研修を参考に、実際の場面を想定して学び合えるロールプレイ研修を取り入れたいので、進め方についてアドバイスがほしいというご依頼でした。

当日は、いわて幼児教育アドバイザー養成の実地研修者と市の担当指導主事も同行し、それぞれのグループに加わり、先生方と一緒にロールプレイ研修に参加しました。

この日のロールプレシナリオは、三つありました。

A 「昼寝の着替えを嫌がる2歳児のSちゃん、保育者、観察者」

B 「保育者、遠慮がちで思いを伝えられない保護者、観察者」

C 「保育者、一緒に行事を担当する同僚、観察者」

先生方はそれぞれの役割を熱演され、観察者のメモはどんどん増えていきました。その後、それぞれのグループでの気づきや感想を発表し合い、全体で「学び」や「次への手立て」を共有することができました。

園の先生方の振り返り

A

様々な場面で「いやだ」と訴える子がいるので、その子を頭に浮かべながら演じました。「いやだ」と言い続けることがあんなに大変だとは思いませんでした。

B

先生に話をしたいことがあっても、なかなか言えない気持ちをどうくみ取るか、どう引き出すか考える機会になりました。信頼関係を深めることが大事ですね。

C

安心して「誰か助けて!」と言えるように、同僚性を高めていかなければいけないと思いました。



イメージ図

いわて幼児教育アドバイザー
実地研修者の振り返り

普段の自分とは違う環境で働く先生方と一緒に学べたことが、貴重な経験になり、楽しかったです!

ロールプレシナリオを演じることで、相手の気持ちや立場を感じることができました。

3 職員の研修等

(1) 職場における研修

職員が日々の保育実践を通じて、必要な知識及び技術の習得、維持及び向上を図るとともに、保育の課題等への共通理解や協働性を高め、保育所全体としての保育の質の向上を図っていくためには、日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり、職場内での研修の充実が図られなければならない。
(保育所保育指針解説 P350 より抜粋)

(幼児教育専門員の目)

先生方からは、共感的なコミュニケーションや傾聴力の向上といったスキル面だけでなく、子どもや保護者、同僚の気持ちをより深く理解できたという感想が多く聞かれました。そのことから、この研修は大変有意義なものだったと感じています。

また、「今度子どもが『いやだ』と言い続けたときには、『よく頑張ったね』と抱きしめてあげてくださいね」とお伝えしました。

【研修報告】

8月7日、岩手県立総合教育センターにおいて、「岩手県幼児教育研究協議会」を開催しました。当日は、幼児教育施設や小学校の教員、行政関係者など、約160名の皆様にご参加いただきました。三つの視点に基づく研究発表や協議、文部科学省の堀越紀香先生による講演を通して、幼児教育の充実に向けた取組について理解を深めるとともに、幼児教育の質の向上につながる多くの示唆を得る機会となりました。ご参加いただいた皆様、貴重な学びの機会をありがとうございました。

○主な内容

〈講演〉 「幼児教育の質評価スケールについて」

文部科学省 国立教育政策研究所 幼児教育研究センター
初等中等教育研究部 副センター長 堀越 紀香



〈第1分科会〉指導と評価
に生かす記録について

金ケ崎町立認定こども園
南方幼稚園
千葉 友里恵 教諭



〈第2分科会〉幼児教育
と小学校教育の接続によ
る教育の充実について

幼保連携型認定こども園
常盤幼稚園
小野寺 祐希 保育教諭



〈第3分科会〉特別な支援を必要と
する幼児の状態等に応じた計画的、組織
的な指導の在り方について

社会福祉法人 盛岡市社会福祉事業団
ながい保育園
西尾 庸子 副園長兼主任保育士



・・・・・・・・・・・・・・・・ご参加いただいた皆様のリフレクションより・・・・・・・・・・・・・・・・

保育実践の質評価スケールについて知ることができて良かった。分野ごとの具体的な指標を見て、保育のよさや難しさが客観的に可視化されていて、自分たちの保育を振り返る際にとても参考になるものだと感じた。自分たちが普段やっていることを客観的な視点で見取っている指標だと思うと、自分の保育で次にこの点についてチャレンジしてみようと思えるものになるのではないかと感じた。

(保育の質評価スケールへの感想・保育教諭)

第1分科会では、記録は子どもの姿を客観的に捉えるだけでなく、保育者同士が対話を深め、指導や評価の改善につなげるための重要な資料であることを再認識した。今後は、子どもの姿を基にした記録と対話を大切にしながら、園や学校への助言や研修に生かし、幼保小の円滑な接続や教育の質の向上につなげていきたい。

(第1分科会参加・行政担当者)

遊びの中で、自分たちで解決したいと子どもたち自身が考え、それを実現していけるように支援していくことは、生活科の学習の中でも大切なことだと思いました。園で経験してきた遊び、関わりと環境構成を小学校でも見直してみたいです。幼稚園・保育園での経験を小学校が知ることが大切だと感じました。

(第2分科会参加・小学校教諭)

第3分科会発表から、支援の必要な子に対するその子自身の今の姿を見取り、計画を立てながらも長期的な願いや育ちを組み込み、細やかな支援につなげるようにしていく必要があると感じました。他の職種と協力してのアプローチが素晴らしかったです。振り返りを共有しながら、園全体で支援していくことが大事だと感じました。

(第3分科会参加・保育士)